慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「共産党宣言」剽窃問題
Sub Title	
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.6 (1925. 6) ,p.894(90)- 941(137)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250601-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

が爲に、其思想を後代に傳へたる所說を摘出すれば、Lauderdale, Malthus に依つて代表せらるゝ生産力說と、Senior, Cairnes に依つて展開せられたる制欲說との二潮流なる可し。蓋し現代利子學說上に於て兩々相對峙して讓らざる、Clark 一派の生産力說と Böhm-Bawerk 一派の價値時差說とは、各々此處に其淵源を溯及せざる可からざるを以てなり。前說是なる乎。後說非なる乎。抑々又兩說は之を調和融合する事の必ずしも不可能ならざる乎。予の討究を後日に期する所なり。

『共産黨宣言』剽竊問題

平井新

（一）

『「共産黨宣言」出版の記念す可き日附は吾人が歷史に、最初にして而も確實なる一歩を踏入れし日である。過去五十年此方プロレタリアの成就せし諸般の進歩に對する吾人の愼重なる判斷は一つに懸りて此日の上に存する。寔に此日こそは新時代の端緒を劃するものである』（註一）との Antonio Labriola の言明は聊か放膽誇張の嫌無きに非ずとするも而も Werner Sombart が近著 Der proletarische Sozialismus. „Marxismus" に於いて『「共産黨宣言」は今日人の知る如く全く何等新しき思想を包含せず、……一として正しき思想を包含せずして全然謬れる思想を以て充溢せるものなり』（註二）との言明の徒に偏執矯激なるに比すれば尙這個「宣言」の歷史的意義を指示するものとして吾人の一顧に價するものと言ふ可きである。

マルクス―エンゲルスは一八七二年、「共産黨宣言」の序文に於いて謂ふ

『過去二十五年間に於いて諸般の事情は著しく變化したけれども、而も此の宣言の裡に展開せられたる一般的原則に到ては、大體に於いて今日に於いても尙依然として、充分正當である。仔細に到ては間々改良せらる可き個所も少く無い。此宣言自身に述べたる如く這個原則の實際的適用に到ては何處に於いても、又何時にても現存の歷史的事情に依存する。從て第二節の末尾に提起せられてゐる諸般の革命的方策には必ずしも特別の重きを置かない。是等の章句は今日に於いては多くの點に於て違たものになつてゐる筈である。過去二十五年間に於ける大工業の異常なる發展及び之れ伴ふ勞働階級の政黨組織、更に又二月革命の實際的經驗、次にはプロレタリアが初めて二ケ月間政權を領有せし巴里コムミュンの實際的經驗、之等の事件に鑑みるときは、此綱領は今日に於いて、所々陳腐に歸した。……。遮莫宣言は一個の歷史的文書であつて吾人は最早之を更改す可き權利を有たないのである』（註三）と。

即ち之に依れば共産黨宣言は、其『革命的方策には最早何等の重きを置かず』又其章句に到ても亦『所々陳腐に歸した』にも不拘、これが『一般的原理に到ては今日に於いても尙ほ依然として充分正當である』のである。而らば所謂一般的原理とは如何。一八八三年該書序文中に於いて、エンゲルスは謂ふ

『宣言を貫く根本思想とは即ち次の如くである、經濟的生産及び之より必然的に生起する各歷史時代の社會組織は當該時代の政治的、知識的歷史の基礎であること、從て全歷史は階級鬪爭即ち社會的發達の各段階に於ける被搾取階級對搾取階級の歷史であること、而して此鬪爭は今や被搾取階級、被抑壓階級（プロレタリア）は

同時に全社會を永遠に搾取、抑壓、階級鬪爭から解放するに非ざれば又彼等を搾取し、抑壓せる階級（ブルジョワジイ）から解放せられ得ないが如き時期に到達せるのである—此根本思想は徹頭徹尾マルクスの賜である』（註四）

此れ唯物史觀に基く嚴密なる社會觀であつてマルクシズムが科學的社會主義と稱せらるに所以のものも一つに懸て此點に存する。然るに這般の見解はエンゲルスの力說するが如く、決して啻にマルクスの創見に非ざるのみならず、又先人の所說を模倣踏襲せしに過ぎずと主張する者現はるるに到つた。露西亞の無政府主義者 W. Tscherkesoff に依つて提起せられたる『共產黨宣言』剽竊問題即ち之である。此れ只に獨り『共產黨宣言』の死活に關する問題たるのみならず、軈てマルクシズムの危機と稱す可きである。

這般の問題は Tscherkesoff が一八九六年公刊したる著作 „Pages d'histoire socialiste. Doctrines et actes de la social-démocratie"（註五）に於いて、マルクス—エンゲルスの「共產黨宣言」が之に先立つ Victor Considérant の著作 "Principes du socialisme; Manifeste de la démocratie an XIX siècle" の換骨奪胎なる所以を剔抉糺彈せしに初まる。即ち曰く

『彼（コンシデラン）の思想の最少部分ですら尙ほ既に、有名なる資本集中の法則並に『共產黨宣言』の全部は勿論、諸般のマルクスの法則及び理論とを悉く包含してゐる、爰に於いてか、エンゲルス自身が『全體として、今日に於いても尙ほ依然として充分正當である』と稱する「共產黨宣言」の全理論的部分即ち第一章及第二章は單なる借用物である。このマルクス—エンゲルスの宣言即ち合法的革命的民主主義の經典はコンシデランの「宣言」の多數の諸章を極めて平凡に言ひ換へたものに外ならないのである。而も啻にマルクス—エンゲルスは其『宣言』の內容をばコンシデランの「宣言」の裡に覓めしのみならず、各章の形式と標題をも亦是等模倣者に依て其儘踏襲せられてゐるのである』と（註六）

Prosper Victor Considérant は佛蘭西の社會主義者であつて、一八〇五年十月十二日 Salins に生れ、一八九三年十二月二十七日死んだ。彼は Lechevalier, Abel, Trauson, Baudet-Dulary 等と均しく Charles Fourier の思想を信奉する最も著名なるフリエ主義者であつた。フリエ主義が、一八三三年頃サン・シモン主義と同一の運命に逢遇しなかつたのは專ら彼に負ふ所大であると言ふ事が出來る。彼は師父フリエの敎義の說法普及に力めフリエの死後其黨派の首領となつた。彼は一八三六年雜誌 La Phalange industrielle を創刊し、更に一八四三年雜誌 La Démocratie Pacifique を起して師說の祖述に寧日を知らなかつた。彼は自己の理想を實現する目的で Texas に赴き其處で „La Reunion" と呼ぶ „Phalanstère" を建設せしも南米戰爭のため遂に挫折し後巴里に歸つたのである。

彼の著書の主なる物を擧ぐれば次の如くである。

Destinée sociale 1834-45. Manifeste de l'école societaire 1841. Théorie du droit de propriété et du droit an travail 1848. Le Socialisme devant le vieux monde ou le vivant devant les morts. 1849. La solution ou le gouvernement direct du people. 1851. De la souveraineté et de la régence 1842. Theorie de léducation naturellen et attrayante, 1845. Description du

phalaustère et considération sociales sur l'artitechonique, 1841. Au Texas, 1854. De Taxas, 1857. Mexique 1868.（註七）

這般の問題は Tscherkesoff の前記著作出版後尙久しく世人の顧る所とならなかつた。此問題が漸く社會主義者の注目を惹くに到つたのは伊太利社會民主黨の左翼急進派の領袖 Arturo Labriola が一九〇二年三月 „Avanti" 紙上に之に對する贊成說を揭載し、更に一九〇五年獨逸の無政府主義者 Pierre Ramus が前記チェルケソフの著作中此問題に該當する部分即ち第十章（註八）と這個ラブリオラの論文とを獨譯し、之と „Engels als Plagiator" なる自作の論文とを併せて „Die Urheberschaft des Kommunistischen Manifestes. なる標題の小冊子を公刊せしに依るのである。Ramus は此小冊子の序文中に謂ふ。

『マルクスーエンゲルスの主著共産黨宣言は全く剽竊に成るものである事は、疑もなく明かである。而も吾人の寬恕し得ざる一事は、彼等が他の剽竊者と同じく單に他の思想家の學說、思想を模寫せしのみにはあらで、自分が利用した思想家を或は讒謗し、或ひは無知の愚物と罵倒した事である』と。（註九）

此問題に對し、Karl Kautsky は一九〇六年 „Neue Zeit" 紙上に „Das Kommunistische Manifest ein Plagiat" なる論文を揭載して之に應へてゐる。

吾人は先づ是等諸士の所說を窺ひ次ぎに其當否を檢討するであらう。Ramus の論文 „Engels als Plagiator" なる論文は自ら別個の討究を要するが故に此處では之が論及を割愛して他日に讓る事とする。

（註一）（Labrisha, Antonio—Zum Gedächtnis des Kommunistischen Manifestes. Übersetzt von Franz Mehring. 1909. S. 1

註二 Sombart, Werner—Der Proletarische Soziolismus. Ed. II. S, 328

註三 Marx-Engels, Das Kommunistische Manifest. Kautsky's Ausgabe, S. 17-18

註四 Marx-Engels, a. a. O.. s. 18-19.

註五 同年和蘭語及び伊太利語に飜譯せられ、更に一九〇二年クロポトキンに依て英譯せらる。

註六 Ramus, Pierre—Die Urheberschaft des Kommunistischen Manifestes S. 10.

註七 Stegmann, Cal. Handbuch des Socialismus I. Bd. S. 141. Vérecque, Dictionnaire du Socialisme p. 124-126. Rapport, Dictionary of Socialism p. 154.

註八 此部分は又英譯に據り延島英一氏に依て飜譯せられ「共産黨宣言の種本」なる標題で勞働運動社より出版せらる

註九 Ramus, Pierre—Die Urheberschaft des Kommunistischen Manifests S. 4.

（二）

Tscherkesoff は謂ふ

『社會民主主義殊にエンゲルスが社會主義の根本思想を以て悉くマルクス及びエンゲルス自身の發見に係れるものと看做せし事は吾人の曩に指證せし所である。實際に於いて獨逸の彼等の讀者達は英國及び佛國の社會主義文獻の存在を知悉せざるが爲めに衷心から之を確信してゐる。一方に於いて社會民主黨の領袖達は政治的術策に汲々として、唯たエンゲルスの二三の小冊子と「資本論」の通俗解說書を其の讀書として甘じて以て、勞働者の前では天晴近代科學の唯一眞個の代表者の風姿を氣取てゐるのである。總ては調子好く運んだ。そして全く獨自の科學の建設者としてのマルクスの名聲は全世界に廣まつた。かくして漸次、自家の議論を人類の眞正の科學に覓めし革命的共産主義者は悉く無知なるブルジョワと罵られ而も屢々敎唆者、政府の廻者としてさへ取扱はるるに到つたのである。何となれば之等の「科學者」は謂ふ、マルクシズム以外に科學無く、亦社會主義無し。現代

社會主義の敎ふる所は總て悉く、夙にマルクス及びエンゲルスに依て概括せられ、殊に其『共産黨宣言』の裡に要約せられてゐると。

斯の如き偏見を持てはこそ、Kautsky が其雜誌 "Neue Zeit" IX, 8 に於いて又諸種の愚物共が、ロシア語、フランス語、其他の國語を以て、此の『宣言』は社會主義の眞價の聖典であるなどゝ口癖の樣に反覆してゐるのだ。此宣言の出版五十年祭が全歐洲語を以て企てられて以來恰度七年になる。總ての『科學的』代議士達が仰々しい論文の裡で此宣言の出現を祝福し、之を以て科學の發展及び人類の發展に對して一個の新なる紀元を劃するものとさへ考へるに到つたのである。

誰か彼等に抗辯し得やう？　エンゲルスは一八七九年其著『排デューリング論』に於いて『若しデューリングの言はんとする所が現今の全經濟狀態が大衆敵對、支配及び隷屬關係の裡に發展する社會史の成果であると云ふ事に存するとせば、彼は『共産黨宣言』以來久しく自明の理となれる事實を反覆せしに過ぎないのである。何人も之を疑ふ權利は無い。何となれば斯事を主張せしものは實に「大」エンゲルス自身であるからである。而して彼と共に Guede, Lafargue, Vandervelde, Ferri 其他の御歷々を含んだ『科學的』代議士達は悉く此新なる啓示、此の新約こそはマルクスに依て、疲憊せる人類のために、かの有名なる宣言の裡に與へられてゐるものであると認めてゐるのである』（註一）

Tscherkesoff は『共産黨宣言』を社會主義の不可侵的經典と仰ぐ諸マルクシストの輕擧を嗤笑した後に更に彼等を揶揄して謂ふ

『「神は偉大なり、而してモハメットは其豫言者なり」と常に唱へてゐる豫言者の熱烈なる信徒が、一朝、彼の長椅子の上に神聖なるコーランの代りに不信神なる異敎徒の著作――而もその中にはモハメットの經典の中で最も神聖視されてゐるものが、遙かに、明瞭に、精確に、廣遠に、深遽なる思想を以て、而もそれ以上比較す可からざる程優れた才幹を以て述べられてゐる著作を見出した時の信徒の精神狀態に成變つて見るが好い。而して彼が屈辱と忿怒に燃えて、而も此啞然たる信徒が尙其上に此不信神な異敎徒の著作がコーランよりも前に世に出て、そして宿命主義の大豫言者モハメットが斯事實を承知してゐた事を知つたら如何であらう』（註二）

Tscherkesoff が爰でモハメットをマルクスに、コーランを共産黨宣言に、而も其の信徒をマルクシストに喩え、不信神な異敎徒の著作を Considérant の著作 Principes du socialisme: Manifeste de la démocratie au XIX siècle に喩えて而も自身をコーランの信奉者たる地位に擬してゐる事は更に呶々を要しない。Tscherkesoff に從へば Marx の Considérant に於けるは恰も前記回敎徒の異敎徒に於けるに全く均しいものである。即ち Tscherkesoff に依ればマルクスの『共産黨宣言』は其內容を悉く Considérant の前記著作に覺めしものである。『共産黨宣言』は Considérant の該著作の換骨奪胎である。マルクスは前記 Considérant の著作の剽竊者である。爰に於いて Tscherkesoff は這個の消息を立證せんが爲め更に語を續けて謂ふ、

『數年前余が Victor Considérant の著作『社會主義の原理。第十九世紀民主主義宣言』"Principes du Socialisme: Manifeste de la démocratie au XIX siècle" それは一八四三年に著され、一八四七年第二版を重ねたのであるが――を讀む機會を得た時、余は這個の信徒と同

様に屈辱を感じ、茫然自失して、而も忿怒に燃えるのを覺えた。而も全く其れには充分の理由があつた。何となれば、Victor Considérant は僅かに一四三頁の小冊子の中で、何時もの明確さを以て、「近代的」マルクシズムの原理を、即代議士達が全世界に押付け様と欲してゐる這個の「科學」的社會主義の全原理を展開さしてゐるからである。嚴密に言へば Considérant が根本問題を取扱つた理論的部分は最初の五十頁を超へない。其他の部分は Louis Philipps の政府がフリエ主義の機關雜誌 „La démocratie pacifique" に加へ、而してセイヌ縣の陪審官に依て棄却された有名なる迫害問題に割かれてゐる。而も此僅々五十頁の裡に、此有名なるフリエ主義者――彼こそは眞の達人である――は非常に多くの深遠なる、明確なる、而も堂々たる概括を吾人に提供してゐる、即ち彼の思想の最少部分ですら、尙ほ既に、有名なる資本集中の法則並に共産黨宣言の全體は言ふに及ばず、諸般のマルクスの法則及び理論とを悉く包含してゐるのである。爰に於いてか、エンゲルス自身が『全體として其は今日に於いて到るも依然として充分正當である』と稱する『共産黨宣言』の全理論的部分、即ち、第一章及び第二章は單なる借物である。此マルクス及びエンゲルスの宣言、即ち合法的革命的民主主義の經典は Considérant の宣言の多數の諸章を極めて平凡に言ひ換へた物に外ならないのである。而も曾にマルクス及びエンゲルスは其宣言の内容をば Considérant の宣言の裡に覓めしのみならず各章の形式と標題をも亦是等模倣者に依つて其儘踏襲せられてゐるのである』と。（註三）

爰に於いて Tscherkesoff は前記 Considérant の著作 Principes du Socialisme: Manifeste de la démocratie au XIX siècle（一八四七年出版の第二版）とマルクス、エンゲルスの『共産黨宣言』とを逐章逐次對照引用して、彼等の剽竊の那邊に存在するやの眞相を忌憚なく剔抉してゐる。吾人は這個問題の實相を成心無く、偏視無く窺知して、其當否を明にせんと欲するものなるが故に、可及的詳細に Tscherkesoff の所說を引用して以て、其所說を傾聽し彼の言はんと欲する所のものを悉く盡さしめやう。以下 Tscherkesoff の論述である。（註四）

× × ×　× × ×　× × ×

Victor Considérant の第二章第二節（十九頁）は次の如き標題となつてゐる。即ち

『現今の狀態と八十九年』『ブルジョワジイとプロレタリア』La situation actuelle et 89; la Bourgeoisie et les Prolétaires

「ブルジョワとプロレタリア」はマルクス、エンゲルスの第一章の標題である。

コンシデランは民主主義の名稱の下に集れる各種の社會主義的、及び革命的諸政黨を研究してゐる。（彼はフリエ主義者を平和的民主主義者と呼んでゐる）而してその各節の標題は次の如くである。

『不動的民主々義』"La démocratie immobiliste, ou le parti des conservateurs-bornes"（三五頁）

『退嬰的民主々義』"La démocratie rétrograde ou le parti revolutionaire"（四一頁）。

『退嬰的民主々義に於ける社會黨　"Parti socialiste de la démocratie rétrograde"（四四頁）

マルクス、エンゲルスの標題は

『反動的社會主義』„Der reactionäre Sozialismus"（三一頁）（カウツキイ版四六頁）『保守的若はブルジョワ社會主義』„Der konservative oder Bourgeois-Sozialismus"（三六頁）（カウツキイ版五一頁）『批評的空想

的社會主義及共產主義』，Der kritische utopistische Sozialismus ；（二六頁）（カウツキイ版五二頁）

誰か此等の標頭が總て同一著書に屬するものである事を信じないものがあるであらうか。而も亦更に內容を相互に比較して見る時、是等の兩宣言が事實に於いて同一物である事が分かるであらう。

今是等兩書の比較を始めるに先立て少しくエンゲルスの叙述の歷史的眞實に關して、讀者の蒙を啓いて置かねばならない。マルクス、エンゲルスは彼等の宣言の初めに於て、說明し、謂ふ

『共產主義は既に全歐洲の諸權力者に依て一個の努力として認められゐる』（一頁）（カウツキイ版二五頁）と。

一八九三年チューリッヒの會議に於いて此同一のエンゲルスは謂ふ

『此時代（一八四三年—四五年）に於いて社會主義は纔に少分派に依て代表せられてゐたに過ぎなかつた』。

爰に於いて、少分派と言ふのか、將、勢力と言ふのか？何れが眞實であるか。此處でマルクス、及びエンゲルスが共に正しいのか將エンゲルスだけが正しいのか？と言ふ問題が起つて來るのは當然である。

今吾々の仕事を續けて行く爲めにはマルクス、エンゲルスの宣言の原本を其始から寸毫も變へる事なく辿つて行つて、ヴイクトル・コンシデランの宣言から同一問題に關する章句を引用し以て兩者を比較對照すれば充分である。遺憾乍ら予の後者からの引用は餘ト長くあり得ない、是れヴイクトル、コンシデランは眞に立派な文章家であるからである。

一、マルクス、エンゲルス（六頁）（カウツキイ版二六頁）

『上古の歷史に於いて、吾人は殆んど到る處に於いて、社會が種々なる身分に判然區分せられ多種多樣なる社會的地位の差別の存することを見出す』。

コンシデラン（一頁）

『古代の社會は權力を原則とし、法律とし、戰爭を政治とし、征服を目的とし且つ奴隸制度を經濟制度としてゐた。即ち最も完全なる、最も殘忍なる、最も野蠻なる形態に於ける人間に依る人間の搾取……奴隸制度が基礎であつた。奴隸制度及び階級的精神。是が古代社會組織の特徵であつた』。

二、マルクス、エンゲルス（六頁）（カウツキイ版二六頁）

『中世に於ては、封建諸侯、家臣、同業組合親方、職人、體僕があり且つ是等階級の殆んど各々に於いて、尙又それ〳〵の等級があつた』。

コンシデラン（一頁）

『封建制度は征服の結果であつた。……其主なる事業は、依然として戰爭であつた。殊に征服より獲得したる原始的特權の傳承的、永久的神聖化であつた。這個封建制度は、從前に比して多少乍其苛酷、殘忍の度を減じた、人間に依る人間の搾取を經濟制度として既に持つてゐた。體僕制度即ち之である。

三、マルクス、エンゲルス（六頁）（カウツキイ版二六頁）

『封建社會の廢墟から生長せし近代的ブルジョワ社會も階級の對立を廢止した譯ではない』。

コンシデラン（二頁）

『新社會は產業、科學及勞働の發達に依て封建社會から生長した』。新法律の形而上學的自由主義に係らず、法律の前に於ける憲法的平等にも拘らず、現在の社會秩序は、最早、原則や法律に於てではなく、事實上單なる一個の貴族的制度である』（五頁）『階級は家柄に依て其相對

的下等及び上等の狀態の裡に永續せられて行く。フランス國民の諸大等級の間に是等の障壁を設けたるものは最早、單に法律、權利、政治的原則ではなく寧ろ經濟組織、社會組織其者である』（六頁）

「經濟組織、社會組織」なる辭句がコンシデランに依てイタリックにされてゐる、之蓋し此最後の辭句が他辭句と同樣に、此時代の社會主義者が今日の政治的「科學的」人士よりも、社會進化に於ける經濟的要素の役目を遙かに好く理會してゐた事を示す可きものであり、且又吾人に示してゐるのである。

四、マルクス、エンゲルス、（六頁）（カウツキイ版二六頁）

『それは只古きものの代りに新しき階級、新しき抑壓の條件、新しき鬪爭の形態を以て置換へたに過ぎなかつたのである』。

此章句に對して、吾人は何等歷史的、社會的事實を指摘する事無く、コンシデランが「新封建制度の急速なる構成—勞働者の集合的奴隸制度」なる標題の下に這個の社會的發達を極めて明確に描寫した第五章全部と引用對照す可きであるが其れでは予の叙述が不當に長くなるので、二、三、章を引用するに止める。

コンシデラン（六、七、八頁）

『最も重大なる一個の現象が今日極めて明白となつた。其れは新封建制度即ち產業的、財政的封建制度の急速なる而も有力なる發展である。其れは中間に介在する諸階級を或は剿滅し或は貧窮に導く事に依て、貴族政治を社會から原則として驅逐する。…此處より發生するものは唯だ僅に、一般的奴隸、資本、勞働要具及び敎育を奪はれた、大衆の集合的隸屬に他ならない。組織無き絕對的自由とは、武裝無き、掠奪せられたる大衆が、武裝を有し而も準備ある敵の軍門に、無條件で降服する事に他ならぬ。貴族的封建制度より發生せし文明、そして其發達に依て產業階級が、個人的若は直接的隸屬から解放された文明は、今や勞働者の集合的若は間接的隸屬を齎せし產業的封建制度に歸着したのである』

五、マルクス、エンゲルス（六頁（カウツキイ版二六頁））

『全社會は愈〻益〻相反目せる二大陣營に、互に間近く對峙せる二大階級に、即ちブルジョワジイとプロレタリアとに分裂しつつある』

コンシデラン（一〇頁）

『第十章の標題「社會が二階級に分裂すること即ち總て所有する少數と總てを剝奪せられたる大多數」

コンシデラン（六頁）（註五）

『此の宏大なる戰場に於いて、或者は訓練され、戰ひに慣らされ、且つ完全に武裝されてゐる。…他者は掠奪され、裸にされ、無知で、飢餓に頻して、日常の生活を營むために、彼等の敵に何等かの勞働と低廉なる賃銀とを哀願する事を餘儀なくせられてゐる…』

コンシデラン（二六頁）

『產業的戰爭は、恰も軍事的戰爭と等しく、征服者と被征服者とを具有する。產業的封建制度は、軍事的封建制度と全く均しく、弱者に對する强者の不幸なる勝利及び永久的優越とに依て構成せられてゐる。プロレタリアは近世的隸屬である』。

六、マルクス、エンゲルス（六頁）（カウツキイ版二七頁）

『工場工業が之に代て現はれた。同業組合の親方は產業的中產階級のために驅逐せられた。』

コンシデラン（六頁）（註六）

『革命は同業組合親方、親方制度及舊式聯合を破壞して仕舞た。…』『八十九年の大爆發の後、

古代政治組織の破壞の後、封建的所有制の破壞の後、親方制度及同業組合親方の產業制度の廢絕の後……』（六―七頁）『革命は親方制度、同業組合親方、產業的所有制を破壞して仕終た。革命は貴族及び僧侶を剝奪したが、何等の新しき制度をも創造しはしなかつた。……それは全產業的及社會的工場を無政府と强者の支配とに委ねた。かくて貧窮、腐敗、譎詐、惡德及び犯罪が跋扈跳梁して增加しつゝある』（三十頁）

爰に於て、吾人は有名なる『共產黨宣言』の、社會民主黨の經典の、此自稱科學的啓示の、第一頁の出典を知つたのである。依之觀之『無知なる空想家達』の方が儿庸の剽竊漢よりも知識の上に於いて遙かに長じ、殊に資本主義的社會の階級形成を描寫すること又遙かに巧みであることを知るであらう。

けれども吾人は此の不愉快な仕事を更に繼續しやう。彼は是等剽竊者達が破廉恥にも不具にして仕舞た點を眞に感歎す可き程、說明してゐる。

『加之吾人は意想外の諸發見が突如として現れて、全生產部門を革新し以て、工場內に混亂を招致するのを、不斷に認める。是等の諸發見は勞働者の四肢を打碎いて、機械に依て直に置換られた多數の人間を失業せしめて後、今度は親方階級を壓倒するに到る』（九―十頁）

八、マルクス、エンゲルス（七頁）（カウツキイ版二七頁）

『ブルジョワジイは一度支配者の位地に昇るや總ての封建的、家長的、牧歌的諸關係を剿滅した。……それは人間の價値を交換價値に換へ無數の神聖不可侵の自由に代ふるに、單純なる不誠實の自由貿易を以てした。之を要するに、宗教的、政治的幻想の假面を被れる搾取に代ふるに、公然たる、破廉恥なる直接の、露骨なる搾取を以てしたのである』

コンシデラン（四、五頁）

『革命（註六）は封建制度の最後の殘骸を破壞した』。同七頁『封建的所有制を絕滅した後に……そして工業及商業の自由の宣言……』『其結果新法律の形而上學的自由主義に拘らず、法律の前に於ける市民の憲法的平等に拘らず……（五頁）……現行の社會組織は尙依然として單なる貴族制度に過ぎない。』（七頁）『工業的社會的競爭場裡に於ては、自分自身、及自己の實力に應じて、自分勝手に行動する個々人が相對立せるのみである』（八頁）（註七）『保證無き自由競爭の厭はしき機械主義は、正義と人道との總ての法則を破壞する。……九頁『自由競爭は、……此非人道的な憎惡す可き性質を有つてゐる。而もそれは到處に於て賃銀を低減ならしむる』

九、マルクス、エンゲルス（九頁）（カウツキイ版三〇頁）

『其等のもの（封建的所有關係）は爆裂せらるしやう。マルクス及びエンゲルスが『自己の發見』に關して、他頁で、如何に言明せるやを觀察する事とする。

七、マルクス、エンゲルス（六頁）（カウツキイ版二七頁）

『爰に於て、蒸氣と機械とが工業的生產を革命した。工場的手工業に代て尨大なる近代的工業が興り、工業的中產階級に代て工業的富豪が起つたのである』

コンシデラン（九頁）

『部門の如何を問はず、實際に於て大資本、大企業は其小なる者に對して一個の法則である。蒸氣、機械及大工場は、其の現るるや、小さき又中位の工場を易々として壓倒して仕舞た。彼等が近づくに從ひ、舊來の手工業、手工業者は影を潛めて、後に遺るものは唯だ工業とプロレタリエルだけである。……』

吾人は更に這個コンシデランからの引用を繼

可きであり、又爆裂せられて仕舞つた。是等のものに代て自由競爭は之に適應せる社會的、政治的構成と共に、ブルジョワ階級の經濟的、及び政治的支配と共に現出した』。

吾人は後にブルジョワジイの政治的支配に就て語るであらう。そしてヴィクトル。コンシデランから「新貴族政治に對する國家の賜給」なる題名の第九章を引用するであらう。假令殊更此部を說明し無くとも、次のマルクス、エンゲルスの自由競爭に關する引用が、同一問題に對するコンシデランの引用の連續であることを易く信用する事が出來ることと思ふ。

マルクス、エンゲルス（七頁）（カウツキィ版二七頁）

『．．一般に大君主制の根本的基礎であつた。ブルジョワジイは大工業及び世界市場の建設以來近世代議國家に於いて、排他的の政權を贏ち得たのである、寔に近代的國家權力は全ブルジョワ階級の共同的事務を執掌する一個の委員會に他ならぬのである』。

コンシデラン（一〇頁）

『總ての地位、總ての軍事的規則、商工業の總ゆる基礎を領有してゐる者は何者であるか。何人が凡ゆる者を侵略するのか。何人が凡ゆる者の長たるか、若しそれが投機と大資本とでなかつたならば．．．．．．．．．．．．．．．．諸君は此不幸なる封建制度が如何位深く既に地中に根差して居ト、且如何許り政治的並に社會的運動を支配してゐるかを知る事が出來たか』。（十二頁）爰にコンシデランは、財政、戰爭及び外交に關する引用を試みた後に次の如き結論を抽出したのである。即ち

『這般の例證に就て見るも、支配的關係を有するものは最早君主でも、大臣でも、國民でも無く、寧ろ、工業的並財政的封建制度であることは明瞭ではないか』

マルクス、エンゲルス（六頁）――コンシデラン（一〇頁及一一頁）

マルクス、エンゲルス（九頁）――コンシデラン（二六頁）

マルクス、エンゲルス（八頁）――コンシデラン（二二頁）

マルクス、エンゲルス（八頁）――コンシデラン（二二頁及二三頁）

此論文の第一部に於いて吾人はマルクス、エンゲルス、及びコンシデランの各著書に就いて次の頁を比較して置いた。

マルクス、エンゲルス（六頁）――コンシデラン（九、十、十一頁）

爰には唯マルクスが其著「資本論」の第一卷の結論たる有名なる資本集中の法則を何處から採入れたものであるかを明瞭に示して呉れる唯一の引用を示すに止める。

マルクス、エンゲルス（六頁）（カウツキィ版二七頁）

『工業的中產階級に代つて工業的富豪が現はれた』

コンシデラン（十、十一頁）

『貨幣は總ゆるものを侵略する。大資本の力は不斷に增大しつつある。それは總ゆる方面に於いて小資本及び中等財產を誘致し、且つ吸收する。．．．社會は長足に墮劣、壓制なる貴族主義の制度に向て行進しつつある。．．．それは既に我々を壓迫し、押潰し初めた。又人民を苦しめ、更に中產階級自身を日々馴致し、征服し奴隸化せしむる。これが近代文明の特徵たる社會現象である。それは機械の侵入と共に歩一歩と商業的及び工業的組織の道を辿る。總て是等のものは新貴族主義の貯水池の裡に國富を注込み、そして其處に資本の集中が行はれ、それに依て

餓えたる貧民とプロレタリアの大群が作り出される。英國に於いては富の少數貴族の手中への集中の現象が極度に示されてゐる。這個の英國の誤れる工業的發展に最も接近してゐるフランス及びベルギーに於いても新しき封建制度が最も急速に擴がりつゝある』

階級闘爭！　經濟的危機！社會民主黨員の語る所に據れば之はマルクス、エンゲルスの最大發見である。扨て吾人は此問題に就て彼等のコーランが果して何と言てゐるかを檢討して見度いと思ふ。

マルクス、エンゲルス（八頁）（カツツキイ版三一頁）

『過去數十年此方工業及商業の歴史は近代の生産關係に對する、ブルジョワジイ及彼等の支配を存立條件たる所有關係に對する、近代の生産力の叛逆の歴史に他ならぬのである』。

這個章句に對して予はヴイクトル・コンシデランの多くの光彩ある叙述を引用することが出來る。

コンシデラン（一七―一九及一八頁）

『プロレタリア及び貧窮の急速なる發展の影響と新封建制度の影響とが未だ革年命的精神の浸潤せる（現代）社會の眞中に齎らした此思想（革命的共産主義の）は勞働者の間に漸次擴つて行く。私有財度を徹廢せよ、財産所有者を倒潰せよ！人に依る人の搾取を撤廢せよ！相續權を廢止せよ！地上は總ての者に！』

次の符合せる章句は省略する事とする。

マルクス、エンゲルス（九頁）――コンシデラン（一五頁）

マルクス、エンゲルス（九頁）――コンシデラン（二三頁）

マルクス、エンゲルス（一〇頁）――コンシデラン（一九頁）

マルクス、エンゲルス（一〇頁）――コンシデラン（八頁）

マルクス、エンゲルス（一〇頁）――コンシデラン（二三頁）

マルクス、エンゲルス（一二頁）――コンシデラン（九頁）

マルクス、エンゲルス（一三頁）――コンシデラン（九頁）

マルクス、エンゲルス（一一頁）――コンシデラン（八、九頁）

マルクス、エンゲルス（一一頁）――コンシデラン（一〇頁）

マルクス、エンゲルス（一二頁）――コンシデラン（二〇頁）

マルクス、エンゲルス（一二頁）――コンシデラン（三二頁）

マルクス、エンゲルス（一四頁）――コンシデラン（二〇―二四頁）

マルクス、エンゲルス（一四頁）――コンシデラン（八頁）

マルクス、エンゲルス（一四頁）――コンシデラン（一三頁）

更に二つだけの引用をして見る

マルクス、エンゲルス（一四頁）（カウツキイ版三七頁）

ブルジョワジイは不取敢自分自身の墓穴人である』

コンシデラン（二〇―二一頁）

『大資本は貴族の一門に集中せられ、大株式會社の制度に依て其勢力を累加し、かくして漸次優勢となる。併し乍ら此發展の優勢は竟に、必然的に、早晩社會的戰場に於いて、革命的闘爭を惹き起さずんば止まないのである。そして若し革命が終決するや否や、敗北者は直に驅逐せられ勝利者は總てを獲得する。而もそれは恰度

ブルジョワジイが舊來の貴族と僧侶に對して爲したると同樣である』

マルクス、エングルス（一六頁）――コンシデラン（四五頁）

マルクス、エングルス（二〇頁）――コンシデラン（四五頁）（註八）

爰に Tscherkesoff は上述の比較的論證を試みた後其論旨を要結して謂ふ

『エングルスは「共產黨宣言」の英國版の序文に於いて該宣言の理論的部分卽ち第一章のみは依然として今日尙價値を有するものであると確言してゐる。吾人はヴイクトル・コンシデランの宣言と際立て符合してゐる這個三九節を比較對照したる後、公然次の如く斷言せざるを得ない、卽ち此場合に於いて、マルクス、エングルスが其共產黨宣言の著作に依つて享く可き唯一の名譽は、彼等が先生から學んだ事を、其儘口眞似して繰返した忠實なる弟子であると言ふ事である』と。

註一　Ramus, Pierre—Die Urheberschaft des Kommunistischen Manifestes s. 9-10.

註二　a. a. O, S. 10.

註三　a. a. O, S. 10-11

註四　引用は總て Ramus の獨譯本に據る。直下に掲げるものは筆者の挿入に懸るカウツキイ版の頁數を示せるものである。

註五　七頁とあるは Tscherkesoff, Ramus の誤である。Considérant の原本は七頁である。

註六　四頁の誤記なる可し、原本には、六頁に該當章句なし

註七　Ramus の譯本には Bourgeoisie とあるも、コンシデランの原本には Revolution とあり、恐らく Ramus の誤記なる可し。

註八　Ramus は頁數を附記せず、無斷にて前句に續かしめたり

註九　Ramus, Pierre—a. a. O, S. 11-17.

註十　Ramus, Pierre—a. a. O, S. 17

III

Tscherkesoff の論證の確實なる事を是認して、自ら這個の論議に參加せしものに Arturo Labriola がある。Ramus の言に依れば彼は伊太利社會民主黨の左翼急進派の領袖である。彼は一九〇二年三月 „Avanti" 紙上に論文を寄せて這個の問題を論究した。Ramus は又此論文を獨譯して前記 „Die Urheberschaft des Kommunistischen Manifests" に收載した。吾人は今之に依て彼の所說を窺知するであらう。

Labriola 曰く

『數日前予は偶然一書を取得した。本書に關して、露國人 Tscherkesoff が、該書は曾に『共產黨宣言』の根本的原理を包含せるのみならず又マルクス、エングルスが『共產黨宣言』を起草するに際して使用したる術語的形態をも包含せりとせし事の全く正當なるを認める。一書とは他無し „Principes du Socialisme; Manifeste de la démocratie au XIX. siècle" なる Victor Considérant の小著である。……『民主主義宣言』は二部に分れてゐる。卽ち

一、社會狀態

二、各種見解の狀態

而して此第一部の二十六頁――形式的には尙數多の空想的要素を包含してゐるが併し乍ら原理上からは全く正當である――の中に吾人が「共產黨宣言」の第一章に讀む事の出來る根本思想が悉く包含せられてゐる』と。（註一）

ラブリオラは「共產黨宣言」の根本思想を次の如く要結してゐる、曰く

『一、歷史的發展は各種階級間の社會的階級鬪爭の成果である。

二、近代的プロレタリアは現行社會組織に對する這般の階級鬪爭に不斷に參加することを餘儀無くせられる。蓋し經濟的發展が進步するに伴れて勞働者は愈々益々奴隸的狀態に陷落する

に到る、而して其狀態は著しく惡化せられつゝある。

三、不斷に行はるる資本の集中は中産階級を滅亡させ、ブルジョワジイ對プロレタリアの階級鬪爭を激甚ならしめる。

四、生産力が既にブルジョワジイの權力及支配の征禦し得ざる程成長せしものなることは、生産の結果たる、破壞的經濟的恐慌に依つて明かに證明せらるる』と（註二）

而してラブリオラに依れば是等の思想は悉くコンシデランの思想に由來するものである。曰く

『總て是等「共産黨宣言」の原理並に理論的根本思想――尤も他の重要ならざる多數の章句も均しく――は民主主義宣言の中に包含せられてゐる。其形式たるは多少乍ら尚ほ幼稚架空の域を脱しないとするも而も其論旨に到ては常に明快であり決定的である』と（註三）

斯くてラブリオラはチルケソフの引用と殆んど同一の章句即ち自由競爭に依て招致せられし勞働階級の貧窮墮落及資本の集中に關する章句をコンシデランの著作から引證する。かくて又彼は謂ふ

『吾人にして若し、總て是等の章句と『共産黨宣言』を對照するときは、マルクス、エングルスの宣言が曾にコンシデランのそれと全然同一の思想を包含せるのみならず亦其表現方法に於いても全く同一なる事を認める』（註四）

『此以上はマルクスも亦吾々に說明しなかつた。否一語も言はなかつた。

貧窮の增大及び資本の集中に關する學說は夙にマルクス以前に於いて、一般に社會主義的批評に依て使用せられたのである、而して此偉大なる獨逸の共産主義者は斯說を唯單に自明の理として採入れたに過ぎないのである。爰に於いてか、民主主義宣言が其後に公刊せられたマルクス、エングルスの宣言の總ての根本思想を包含してゐると言ふ事實は吾人の安じて主張し得る所である。……依之觀之ヴイクトル・コンシデランの民主主義宣言が共産黨宣言の眞正の父であると云ふ事實を爭ふ事は出來ない』と。（註五）

斯てラブリオラは自家の所論を要結して謂ふ

『是等の論述の裡に、吾人は、社會革命並全生活の諸現象を以て經濟的進化の所産と看做す所の見解の最初の思想、及マルクス、エングルスの面目を躍如たらしめた見解――彼は一層明確に之を展開してゐる――を全く明瞭に認識する事が出來る。吾人はマルクス、エングルスの功績を多とすると共に又次の事を是認しなければならない。即ち這個見解の根本原理及び學說は事實上既に共産黨宣言の公刊に先つこと數年前に熟知せられてゐたと云ふ事である』と。（註六）

註一　Labriola, Arturo—Das demokratische Manifest in die Urheberschaft des Kommunistischen Manifestes S. 21.
註二　a. a. O, S. 22
註三　a. a. O, S. 22
註四　a. a. O, S. 23
註五　a. a. O, S. 24
註六　a. a. O, S. 24

四

這般の剽竊指摘に對して、マルクス派側の採れる態度は果して如何。是れ次に吾人の必ずや、論及せざる可からざる緊要問題である。蓋しマルクシストが此抗議を如何に處理し、決濟するやの一事は、軈てマルクシズム全體の死活を決定する所以のものであるからである。

カウツキイは „Die Neue Zeit" (24 Jahrg.

2 Bd. 6)3-702）紙上に，Das Kommunistische Manifest ein Flagiat."『共產黨宣言は剽竊なりや』の一文を設けて此問題に應へたり。彼は此挑戰に對し毫も其擧措を失はず、寧ろ樂觀的態度を持せり。彼は辨疏相力むるに非らずして、寧ろ對者の非を戒しむる諄々たる訓戒の態度に似たり。即ち彼は謂ふ

『マルクス及びエングルスの假面を剝いで、次て之を剽竊者と看做さんとする擧は決して新奇のものに非らず、寧ろ數年來常套的遊戲となれるものである。人はマルクス及びエングルスが無斷で借用した秘密の種本を探し出して來て、一擧に是等兩翼を打つたのである。人は又近世的、科學的社會主義の父及此社會主義を貶下し同時に且つ數十年來世人に看過された古書に通曉する自己の博學に依て世人を困惑せしむるのである。

然し從來之等剽竊指摘者達の結果に徵するに常に彼等の探出した剽竊が、何れも自己の無智に基とか、然らずんば彼の早計に過ぎざりし事を示證したに過ぎないのである。而も彼等の方法たるや極めて安價のものであつて、殆んど考究の餘地すらも遺さざるものである』と。（註一）

斯くカウツキイは此種の問題に對し何等答辯の必要無しと認め乍ら爰に一文を草したる所以は他なし。此種の提議が曾に世人を困惑せしむるに止らず、更にマルクス派側の人士中にも往々にして此誣言を輕信するものが存在するからである、即ち謂ふ

『之あるに不拘、同志。否著名なる同志にしてチェルケソフの主張を極めて眞面目に受取る者すら存在する　此問題が極めて荒唐無稽のものたるに不拘、予が之を論及する所以のものは實に此點にのみ存するのである』（註二）と。

カウツキイは前記チェルケソフが引用對照したるマルクス及コンシデランの章句を再び引用し來てチェルケソフの言質の當否を檢討する。

マルクス、エングルス（六頁）（カウツキイ版二六頁）

『上古の歷史に於いて吾人は殆んど到る所に於いて社會が種々なる身分に判然區別せられ、多種多樣なる社會的地位の差別の存することを見出す』

コンシデラン（一頁）

『古代社會は暴力を原則とし、法律とし、戰爭を政治とし、征服を目的とし、且つ奴隸制度を經濟制度としてゐた。即ち最も完全なる最も殘忍なる、最も野蠻なる、形態に於ける人間に依る人間の搾取……奴隸制度が基礎であつた。奴隸制度及び階級的精神。之が古代社會組織の特徵であつた』

『共產黨宣言』（六頁）（カウツキイ版二六頁）

『中世に於いては、封建諸侯、家臣、同業組合親方、職人、體僕があり、且つ是等階級の殆んど各々に於いて尙又夫々の等級があつた』

ヴイトル・コンシデラン（一頁）

『封建制度は征服の結果であつた。其主要なる事業は依然として戰爭であつた。殊に征服より獲得したる原始的特權の傳承的、永久的神聖化であつた。此封建制度は從前に比して多少乍其苛酷殘忍の程度を減じたる、人間に依る人間の搾取を既に經濟制度として有つてゐた。體僕制度即ち之である』

カウツキイはチェルケソフがマルクスの剽竊を剔抉する爲めに援用した此等兩章句を檢討して、彼の思惟する如く、マルクス、エングルスがコンシデランを剽竊せるものと遽かに論斷す可からざる所以を說く。曰く

『譫語を喋々するのは止して貰ひ度い。畢竟譫語には易は無い。一體何處に剽竊は存在するのであるか。マルクス、エングルスがコンシデランから盗んだと稱する思想は那邊に存在するのであるか。古代に於ける奴隷制度の存在、中世に於ける體僕制度の存在是等の思想がコンシデランが發見し、マルクス、エングルスが彼から取つた筈の思想であると言ふのであるか。チェルケソフが兩宣言に共通せるものとして指摘せる總ての思想は這個宣言成立當時既に世人周知の事實であつて當時に於ける各種の文献中に明かに表明せられてゐるのを發見することが出來る。コンシデラン獨自のものとしては精々彼が此事實を提示し、且つ相互に關連せしめた特殊の方法位のものである。而も亦此點に於いてマルクス、エングルスと區別せらるるのである。……斯くして彼の出發點である暴力説の如きは徹頭徹尾非マルクス的であり加之極めて卑俗のものであり而も其は古代及封建社會の基礎を戰爭及び征服に覓め、決して特殊の生産方法に覓めんとするものではない。チェルケソフが共産黨宣言の叙述を如何に見當違ひのものと對立せしめたかを示すには一例丈で充分である。チェルケソフは謂ふ

『階級闘爭！經濟的危機！之は社會民主黨員に依ればマルクス、エングルスの最大の發見である。扨て吾人は此問題に就て彼等のコーランが果して何と言つてゐるかを檢討して見度いと思ふ』。

マルクス、エングルス（八頁）（カウツキイ版三一頁）

『過去數十年此方工業及び商業の歴史は近代の生産關係に對する、ブルジョワジイ及彼等の支配の存立條件たる所有關係に對する、近代の生産力の叛逆の歴史に他ならぬのである』

ヴイクトル・コンシデラン（一七―一九、一八頁）

『プロレタリヤ及び貧窮の急激なる發展の影響と新封建制度の影響とが未だ尚ほ革命的精神の浸潤せる現代社會の唯中に齎らしたる此思想（革命的共産主義）は勞働者の間に漸次擴つて行く。私有財産を撤廢せよ！財産所有者を倒せ！人に依る搾取を撤廢せよ！相續權を廢止せよ！地上は總ての者に！（是等の形式は飢餓と赤貧とに泣ける大衆に取つては、極めて單純なものであつて、彼等に容易に理會せらるるのである云々・）』

チェルケソフのコンシデランからの引用は甚だ不充分のものである。括弧の中の章句が缺けてゐる。それ故に、外見上は、コンシデラン自身が革命的共産主義の觀念を擁護したかに見える、が併し其實コンシデランは之を征服するために論及したに過ぎないのである。

爰でもチェルケソフはコンシデラン及マルクス、エングルスの思想的符合を故意に附會せんために、直接コンシデランを僞造したのである。而も之れすらも大した役には立てゐない。此僞造の引用が『共産黨宣言』からの引用と同一思想を表明せるものと假定すれば、成程其處に思想的窃盗が存在するかも知れない。惟ふに一八四七年代に於いて工業中心地に於けるプロレタリアの謀叛が急速に發達し、共産主義思想の傳播を有利ならしめた事を世人が知らなかつたであらうか。此れが實際に於いて、吾人が之を表明するために態々コンシデランから盗まねばならなかつた思想であつたのか。兩宣言が同一事を表明したとて吾人は之をしも剽竊と云ふ事は出來ない。否寧ろそれは、同一の、一般的に周知の事實を同樣に確證せしに過ぎないのであ

る。

所が此等宣言は決して全くの同一事を表明しては居ないのである。兩者が同一思想を表明してゐる事を考へるには勢ひ『共産黨宣言』の所謂「生産力の叛逆」を工業勞働者の叛逆の意に解せざる可からざる事となる。然るに引用の前後關係は決して此事を許さないのである。章句に謂ふ

『斯くも偉大なる生産及び交通手段を魔法をもて喚起せし、ブルジョワ生産及交通關係、ブルジョワ的所有關係、及び近代のブルジョワ社會は今や恰も、呪文を唱へて自ら喚び起せし諸々の下界の力を最早征禦する力なき魔法使に均しい』

之に前記の章句が續く、

『過去數十年此方工業及び商業の歴史は近代の生産關係に對する、ブルジョワジイ及彼等の支配の存立條件たる所有關係に對する、近代の生産力の叛逆の歴史に他ならぬのである』

此章句の後「共産黨宣言」は更に語を繼いで謂ふ

『吾人は其證徴として、定期的に循環回歸して、全ブルジョワ社會の存立を嚇かすかの商業恐慌を擧ぐれば足る。商業恐慌に於いて、曾に産出せられたる生産物のみならず、既に産出せられつゝある生産物の一大部分が十中八九破潰せられて仕舞ふ。是等恐慌に於いて、從來一個の沒理と見えるが如き一個の社會的疫病――過剰生産の疫病が發生する』と。

吾人は爰てマルクス、エングルスの所謂「所有關係に對する近代生産力の叛逆」がコンシデランの所謂ブルジョワ的財産に對するプロレタリアの叛逆と何等共通するものを有しない事を認める。從て是等兩章句を對照して、共産黨宣言の思想を以て、コンシデランの思想の大膽なる竊盜と認むる事は正しく狂氣の沙汰と言ふ可きである』。（註三）

カウツキイは更にチェルケソフの考證に左袒せるラブリオラに對して論鋒を向けてゐる。彼はラブリオラが自己の考證の不周到、不用意のために、チェルケソフの見解を擁護するに到れる輕擧を難詰してゐる。

彼は謂ふ

『ラブリオラ惟へらく、貧困說、資本集中說はマルクスに先て夙に社會主義的批評家に依つて一般的に使用せられてゐたと。併し乍ら彼は這個批評の立場、並之に對する民主主義宣言の關係に就いて何等知悉する所がない。其れにも不拘、彼は斷乎として自己の判定を下してゐる。若し彼にして今少しく同時代の他の社會主義者を一瞥するの勞を惜まざりせば、事實上彼は、這般の思想が既に廣く行はれてゐた事を發見したであらう。當時の社會主義者は悉く是等の思想に通曉してゐたのである。例之かのルイ・ブランの如きは一八三九年其著『勞働の組織』に於いて次の如く言えり。

『無制限の競爭の支配下に立つては、貨銀の不斷の下落は必然的に一個の一般的事實であつて何等例外的のものではないとの事實を觀取し得ざる程の盲目者ありや』。（同著ブラーグル譯獨逸版一八九九年二九頁）

『極端なる貧窮、家族の潰敗は競爭の結果である』（同書六〇頁）

カウツキイは謂ふ

『吾人はチェルケソフ及びラブリオラがコンシデランの「宣言」を以て共産黨宣言の思想の秘密の種本と認めたのは正しく純乎たる偶然である事を知る。同樣に彼等は這個ルイ・ブランの著書若くは當時の他の社會主義者の著作に於ても

同様に共産黨宣言の思想を發見したであらう。

マルクス及びエンゲルスが、共産黨宣言を以て十九世紀社會主義は初まれるものと主張するとせば、恐らく彼等は剽竊者たるを免かれ得ぬだらう。併し乍らマルクス、エンゲルスはコンシデランを剽竊せしものであると主張するものは當時の他の社會主義者中唯だコンシデランの名しか知らないでゐる者の言であらう。蓋し共産黨宣言がコンシデランの宣言と共通する思想は又當時の他の社會主義者とも共通せるものであるからである。

所謂貧窮說、資本集中說が當時他の社會主義者の認むる所であり、而して彼等社會主義者が總て彼の社會主義を資本家的生産方法の經濟的傾向の上に基いたとすれば、殘る所、共産黨宣言の獨特の功績は果して那邊に存在するのであるか。

「共産黨宣言」の功績は第一、這般の諸說が共産黨宣言に於いて、當時の他の社會主義者に於けるよりも一入深刻に現はれてゐること。第二、階級鬪爭を以て社會進化の推進力として認識し而して此認識をプロレタリアの階級鬪爭に適用せしことの二事に存在するのである。然るに他の社會主義者は之に關し全く言及する所がないのみならず、コンシデランの一派に依れば、階級鬪爭は最も嫌惡す可き罪過であると認められた。勿論階級鬪爭の事實はコンシデラン及彼の同僚の熟知せる所であつたけれども彼等は這個階級鬪爭が如何にして經濟的發展より必然的に成長し、かくして新社會を準備するものなるかを觀取しなかつたのである。彼等は尙ほプロレタリアを信賴しなかつた。そしてプロレタリアが獨力で自己を解放す可き事を不可能事と認めた。(それ故)彼等は總ての溫情的精神に訴へた。

而して此等の溫情的精神は軈て結合して以てプロレタリアを解放す可きものと考へた。彼等がプロレタリアの增大する貧窮を指摘せしは、專らブルジョワ分子の同情を喚起する爲であつた。從て彼等は增大する貧窮の事實特に、無産階級の增大する墮落に注意を向けたのである。マルクス、エンゲルスに到て始めて增大する貧窮の裡に、貧窮に對する增大する鬪爭を認め、此鬪爭の裡に、自己解放手段としての勞働階級の向進的叛逆を認めた。爰に於いて貧窮說は全く面目を一新したのである。プロレタリアを抑壓せんとする資本の不斷の努力と全く同様に、自己を高めんとするプロレタリアの不斷の努力は必然的のものである。斯る敵對的傾向は種々の形態を採り、種々の結果を招致するに到る。……遮莫吾人は到處に於いて、階級對立の不斷の成長、階級鬪爭の不斷の深化を認める。而して是等のものは、結局資本に對するプロレタリアの決戰に導かねば止まない。

此れ一般社會主義者のプロレタリア貧窮說に關する新しき、マルクス的見解である。此見解は既に「共産黨宣言」に包含せられてゐる。尤も該宣言に於いては、當時の一般プロレタリアの狀態、及び一般社會主義的見解に即して、貧窮に對するプロレタリアの增大する叛逆、貧窮への沒落がマルクス、エンゲルス後年の著作に於けるよりも著しく强調せられてはゐるが、兎も角這個の見解が「共産黨宣言」に包含せられてゐる事は拒むことは出來ない。貧窮、資本集中小企業の沒落に對する資本主義的傾向は、マルクス、エンゲルスに於けると、コンシデラン並四十年代の社會主義者に於けるとは自ら別個の役割を演じてゐる。後者に於いては、斯る傾向の顯著となる事は、本質的に煽動的目的に資す

る所以である、それは有産階級の感情を刺激する。彼等は現行社會に於ける自家の地位の如何に不安であるかを認めるに到る。即ち彼等の大資本は沒落に依つて威嚇され、死物狂の民衆の叛逆に依て威嚇せられてゐるのを認める。ブルジョワジイが之を回避するの道は唯だ社會主義に移る事に依てのみ可能であると。

マルクス、エングルスに於いては、之と全然別個の役割を演じてゐる。彼等に在つては、プロレタリア革命は、決して恐怖に刺激を與ふ可き出來事ではない、それは彼等の最善の希望である。彼等は有産階級を問題としない。彼等は有産階級の恐怖にも、同情にも期待を置かない。資本集中は彼等に在て重要である。蓋し彼等は其事實の裡にこそ、プロレタリアに依て創造せらる可き新社會の經濟的要素の建設を認める。這個の要素は純粹理性から創造せられ、發明せらる可きものに非らずして、事實の裡に發見せられ、看取せらる可きものである。

資本集中、大衆の貧窮はマルクス、エングルスが、之に依り社會進化の必然的目標並手段を導き出した現象である。彼等はプロレタリアに自覺を促し、經濟的進化に依てプロレタリアに提起せられし任務を自覺せしむる事を以て自家の責務と考へたのである。之に反して、『共産黨宣言』成立當時の他の社會主義者の見解に依れば、貧窮の增大、小企業の沒落は、有産階級の恐怖と同情とを喚起するに適はしき現象であつて、有産階級は之あるに依て社會主義に好感を抱き、かくしてプロレタリア革命を未然に防ぐのであると。

此事實こそは、「共産黨宣言」の諸見解と當時の他の社會主義學說との間に存する、大なる根本的相違である』（註四）

カウツキイは更に語を繼いで謂ふ

『若しマルクス―エングルスが「共産黨宣言」に於いてコンシデランの宣言を剽竊したりとせば、不尙取該宣言の根本思想も亦コンシデランの宣言中に含ませらる可き道理である。然るに實際に於いては、コンシデランの宣言は四十年代の社會主義を共産黨宣言から截然區別す可き總ての見解を含んでゐる』。と。

爰に於いてカウツキイはコンシデランの『社會革命論』を引用して、マルクス―エングルスのそれと如何に大なる逕庭の其間に存在するかを闡明する。

コンシデランは前記著作に於いて、貧窮說、資本集中說を展開したる後、十節に於いて社會革命に就いて論及を試みたり。曰く

『吾人は欺瞞されてはならない。斯る事態が若し永續し、發達するに於いては寔に危險千萬と謂ふ可きである。佛蘭西國民は、愛蘭英蘭に於ける都市及平原の勞働階級の轍を踏んで、苦境に陷る事があつてはならない。……我國に於ける勞働階級が斯程度の反抗と敵意とを抱くに到る迄には尙十の革命を經なければならない。

若しも、工業的封建制度が全歐洲を席捲して、社會戰爭の大なる叫が、「勞働に甘じて生きるか戰ふて死するか」となり、軈ては、無數の近代的奴隷の群を蜂起せしむるに到らば、果して、文明、政府、上層階級の成行は如何に。

今や政府の賢明、聰明にして自由なるブルジョワジイ及科學が機を逸せず、覺醒するでなければ歐洲社會を震駭せしむる運動は直接社會革命に趨き、吾人亦歐洲の內亂に遭逢す可きは火を睹るよりも明かである。……而らば眞正の保守主義者、聰明にして達眼の保守主義者とは何人であるか。宜

しく政治上、社會上の權力者は時局に通曉し以て、難境を救濟し、誤解された權利並に利益に滿足を與え、かくて社會の安全なる平和的進化を可能ならしむることを希望して止まざる人士なるか。或ひは自家の運命に安じて、社會團體の甚しき貧窮を研究するを畏れ、かくて斯事にたづさはるの要なきものと思惟する人士なるか。總てを破壞する嵐を鎭める人士こそ正に斯人ではないか』。（註五）

次節に於いて更に謂ふ

『吾々こそは、聰明にして先見の明ある保守主義者である。吾々こそは、上流、中流階級の見識ある人間であり、總ての階級中最も溫情に富める人間である。既に五十年間の革命に虐なまれし現行の我社會は今や危機に頻してゐる。而して此嵐を免れんと欲せば宜しく之が愼重の研究と、應急の救治策とを要す』。（註六）

珍奇なる階級鬪爭論と言ふ可きである。

コンシデランは次章に於いて社會問題解決の二法を研究してゐる。其一つは共産主義即ち、數年來佛蘭西、英國、白耳義、瑞西、獨逸に傳播せられてゐる思想である。此思想は大衆を誘惑し、煽動してゐる。コンシデラン曰く

『此解決策は、其本質に於いて消極的であり、且つ革命的であつて、資本の社會的闖入及壓政的支配に對する一個の反動に過ぎない。共産主義は貨幣と財産とが其正規の權利を享く可き事情の下に於いては到底成立しないであらう。而して何等獨自の長所を有たないであらう』（註七）

次節に於いてコンシデランは當時の狀態と一七八九年の狀態とを比較して謂ふ

『此兩事態及兩時代は全く酷似してゐる。共に最も焦眉の問題を蔑視し、共に國民の運動及其意義に關しては無智であり、共に事態に盲目であつた。併し乍ら幸にも今日に在つてはプルジョワジイは多數であり、彼等の悟性は覺醒してゐる。勞働階級の物質的、道德的慘狀並之を救濟す可き必要に對する感情がブルジョワジイに現はれて來た。社會的慈善が彼等の身に浸徹し、彼等を鼓舞した。加之ブルジョワ階級は、産業組織に於ける保障を與えること、財政的貴族主義の跋扈跳梁に對する抵抗に關し、プロレタリアと其利害を均ふすることを觀取するに到つた』。（註八）

併し乍、社會問題の解決は決して共産主義即ち純乎たる消極的、革命的、非社會的、幻想的手段に依つて成就せるものではない。唯一の正當なる解決策は（彼に依れば）資本、勞働、才能が調和的に協働す可きフリエ主義的組合の創設に存する。曰く

『資本、勞働及才能は生産の三要素であり、富の三根源であり、産業的機構の三輪であり、社會進化の三大本源手段である。是等を代表する三階級は共通の利害を保有する。而して其任務とする所は、資本家並に國民の爲に機械を運轉して、決して資本家の爲めに而も國民の利益に逆て之を運轉しないと云ふ事に存する。斯くて初めて諸階級を結合して國家の統一を計り、國家を結合して人類の統一を計る事が出來るのである』と。（註九）

コンシデランの前記著作の第二部には「共産黨宣言」と同一の思想過程が叙述せられ、佛蘭西に於ける各種の政治的、社會的黨派の批評を試みてゐる。其處では、政治的鬪爭、革命、共産主義は、危險なるものとして否認せられ、平和的なる組合創設に依る人類の解放、資本と勞働との調和が讃美せられてゐる』。（註十）

斯くてカウツキイは自家の論旨を要結して曰

く、

『寔に、這個兩宣言を相互に比較對照し、而も少くとも當該時代の社會主義的文獻を識れるものは、是等兩宣言に共通せるものは唯單に總ての社會主義に固有なる最も表面的の思想過程であり、而も是等は當時社會主義者の間に論議せられ而も社會主義者の各種傾向を相互に岐つ可き總ての點に於いて、正しく相反するものなる事を觀破するであらう。民主主義宣言の多數の章句は正しく『共産黨宣言』に對する一個の反駁たるの感さへある。尤も前者は後者より以前に書かれたるものなるが故に、事實然ある可きこと無きは勿論であるけれども。今是等兩者の關係を改めれば、結局次の如く看做す事が出來る、即ち『共産黨宣言』は之に先つて著れた民主主義宣言に對する一個の辯駁書を形成するものであると。併し乍ら事實上、『共産黨宣言』は啻に、此一個の民主主義宣言に對する辯駁書たるのみならず亦之に先つ總ての社會主義文獻に對する辯駁書と觀る事が出來る。『共産黨宣言』は是等の文獻を批評し以て是等を超越し、而して社會主義に一個の新しき基礎を提供したのである。社會主義をプロレタリアの階級鬪爭の上に建設せし所にこそ、光輝ある勝利は存するのである。爰に於いて、人若し、共産黨宣言はコンシデランの民主主義宣言の模寫なりとの結論を得んと欲せば、勢ひ、共産黨宣言の思想過程を極めて皮相的に、無造作に理會し、且つ當時の社會主義的文獻に耳目を辯するの他なかる可きなり』と。（註十一）

註一　Kautsky, Karl—Das Kommunistische Manifest Ein Plagiat. Neue Zeit. 24 Jahrgang. II. Bd. S. 693

註二　a. a. O, S. 697.

註三　a. a. O, S. 695-696.

註四　a. a. O, S. 697-700.

註五　Considérant, Victor—Principes du Socialisme: Manifeste de la démocratie au XIX siècle. p.13, 14.

註六　Considérant,—ibid. p. 17.

註七　Considérant,—ibid. p. 18-19

註八　Considérant, ibid. p. 20.

註九　Considérant, ibid. p. 22.

註十　Kautsky—a. a. O, S. 700-701

註十一　Kautsky—a. a. O, S. 701-702.

五

以上吾人はマルクス—エングルスの『共産黨宣言』は畢竟コンシデランの『社會主義原理』の巧妙なる剽竊なりとするチェルケソフの見解並に之に對するラブリオラ及びラムウスの贊成說を述べ、更に斯說に對するマルクス派側の代表的見解としてカウツキイの辯駁を照會した。吾人は次ぎに是等諸家の所說を論評し併せて論者の所信を論述するであらう。

吾人の觀る所に據ればチェルケソフ、ラブリオラ及びラムウスに對するカウツキイの論駁は大體に於いて吾人の首肯し得可き所であり且つ又彼等の當然甘受せざる可からざる所であらう。即ち吾人は彼等の挑戰に對する應答は概ね、カウツキイに依て盡されてゐると思考するが故に吾人の論述は單に之を補足する範圍内に於いてのみ必要でると考へる。

吾人は敢てチルケソフの指摘するが如く兩者の部分的章句の相似せる事實を認めるに吝かなるものではないが、爲めに此外見的類似に眩惑せられて兩者の間に到底超ゆる可からざる思想的鴻渠の介在するの事實は之を看過してはならない。マルクス、エンゲルスもコンシデランも共に階級的社會觀を懷抱せる點に於いて其軌を同うせるの一事は、確かにチェルケソフ（註一）の所論の如くなれども、而も彼がカウツキイ（註二）の指摘せるが如く一は社會成立の基礎を特定の生産方法に覓め、他は之を權力に覓めし事實に

氣附かずして遽にマルクスエーンゲルスの剽竊を口にせるは只管彼が考證の粗漏を示すものに外ならないのである。

チェルケソフに據れば、資本主義的社會に於いて、プロレタリアの地位は物質的にも精神的にも、毫も改善せられざるのみか益々貧窮、劣惡とならざるを得ないと言ふ所謂貧窮說に於ても共産黨宣言はコンシデランの所說を模倣せしものであると。併し乍ら這個の貧窮說は決してコンシデランの創說でもなく、又マルクスーエンゲルスの之を模倣せしものでもない。産業革命に伴ふ工場工業の齎せしプロレタリアの數奇なる運命に括目せしものは單に社會主義者、人道主義者に止まらずブルジョワ階級に屬する爲政者、政論家亦然りであつた。かの英國に於けるトムソン、ホジスキン、ブレイ等のリカルド派社會主義の勃興、救貧法等の社會的立法其他諸般の社會的施設は這般の消息を窺はしむるに足る。

前記カウツキイが援用せるが如くルイ・ブランの如き夙に此事實を明確に認識してゐる。（註三）マルクスが一八四四年『神聖家族』に謂へるが如く『プルードンは資本の運動が如何にして貧困を造り出すかを詳細に論證した』（註四）のである。サン・シモン亦此事實に着眼せし事はエンゲルスの言に明かである。即ち謂ふ『然し、サン・シモンが特に重きを置き、何者にも增して、第一に興味を持つたのは最も多數にして、最も貧困なる階級の運命であつた』（註五）フリエ又然りである。斯の如く彼等の社會主義は一樣に此貧窮の事實に依つて喚起せられたるものであり、從つて彼等は又此貧窮の艾除を以て自家學說の任務とした。

依之觀之コンシデランの所謂貧窮說は彼を俟つ迄も無く夙に之等の所謂空想的社會主義者に依つて唱導せられたのであつた。かくて此當時の社會主義的文獻には斯種の說は諸所に之を散見する事が出來るのであつて必ずしもコンシデランの創說ではない。況やマルクスーエンゲルスは毫も彼の說を模寫せしものではない。『吾人はチェルケソフ及びラブリオラがコンシデランの「宣言」を以て『共産黨宣言』の思想の秘密の種本と認めたのは全く純乎たる偶然の事である。同樣に彼等は這個ルイ・ブランの著書若くは當時の他の社會主義者の著作に於いても均しく『共産黨宣言』の思想を發見することが出來たであらう。マルクスーエンゲルスはコンシデランを剽竊せしものであると主張する者は當時の他の社會主義者中唯だコンシデランの名しか知らない者の言であらう。蓋し『共産黨宣言』とコンシデランの著書とに共通する思想は亦當時の他の社會主義者とも共通せるものであるから

である』（註六）とのカウツキイの言は吾人の全く首肯し得る所である。併し乍ら吾人は一つの最重要事を看過してはならない。其れは此等社會主義者――コンシデランをも含む――の貧窮說とマルクスーエンゲルスのそれとの間に根本的相違の存することである。嘗てマルクスは「哲學の貧困」に於いてプルードンを評して『彼は貧困の中に貧困を認める錯覺を學び來る』（註七）と謂つたが此辭句を以て其儘前記社會主義者の貧窮說に當嵌める事が出來る。即ち『彼等は、何等の計畫が、主として社會の最も痛しき階級たる勞働階級の利益を代表するといふ事を知つてゐた。彼等はプロレタリアを以て社會の最も痛しき階級と考へ』（註八）に過ぎなかつた。換言すれば彼等は一樣に貧窮の中に舊社會を顚へす可き革命的破壞的要素を觀取することは出來なかつた。之に反してマルクスーエンゲルスは貧窮の

中に將來社會實現の要素を認める。即ち資本主義は曾に貧困に導くのみならず又其は苦惱せる階級に、ブルジョワ社會の瓦壞、共産社會の建設を許容し、必然的に之を强制する所の諸條件を與ふる事に依て貧困の廢止に導くとの新學說を附加したのである（註九）此事實はコンシデランを初め前記諸社會主義者の看過せし重要なる點であつてマルクス―エンゲルスと彼とを截然區別する點である

資本主義社會に於ける自由競爭の結果大企業は漸次小企業を壓倒併呑し、資本は次第に少數企業家の掌中に集中歸屬するとの資本集中說に關しても亦同樣である。チェルケソフは斯說に於いても亦マルクス―エンゲルスはコンシデランを剽竊せしと說く。而してラブリオラも亦之に左袒する。吾人は斯說がコンシデランの著書に明かに觀取せらるる事を否むものではない。

併し乍吾人は此說に於いてもマルクス―エングルスとコンシデランとの間に大なる輊輕の存することを認めざるを得ない。コンシデランは一方大企業が小企業を壓倒し、大資本が小資本を併呑し之に伴ふプロレタリアの增大を如實に描寫し、他方人爲的方法に依て這個趨勢を回避せんと欲した。之に反しマルクス―エンゲルスは資本集中の中に矛盾を包藏する事、即ち資本の集中は定期の經濟的恐慌を招致して勢ひ資本主義經濟組織の必然的崩壞を豫定した。即ち『共産黨宣言』に謂ふ

『過去數十年此方工業及び商業の歷史は近代の生産關係に對する、ブルジョワジイ及び彼等の支配の存立條件たる所有關係に對する、近代の生産力の叛逆の歷史に他ならぬ。吾人は其證徵として定期的に循環して、全ブルジョワ社會の存立を嚇かす、かの商業恐慌を擧ぐれば足る。商業恐慌に於いて、曾に産出されつつある生産物のみならず、既に産出せられたる生産物の一大部分が十中八九破壞せられて仕舞ふ。是等恐慌に於いて、從來一個の沒理と見えし一個の社會的疫癘――過剩生産の疫癘が發生する。……社會の使用に供せらる可き生産力が最早ブルジョワ的財産關係の促進に役立た無くなつたのだ。之に反して此關係に取て餘りに有力となり、之に依て妨害せらるるに到つた。そして是等の生産力は這個の障碍を征服する度毎に全社會を無秩序に陷れ、ブルジョワ的財産の存在を危地に陷れる。ブルジョワ的諸關係は之に依て産出せられし富を包藏するためには、餘りに狹隘となつたのである。ブルジョワジイが封建制度を倒すに用ひた武器は今や正にブルジョワジイ其自身に向けられる事となつたのである……大工業の發展に伴ふて、ブルジョワジイの生産を行ひ、且つ生産物を領有す可き基礎が奪ひ去られる。ブルジョワジイは不取尙自分自身の墓穴人を生産しつつある。彼の沒落とプロレタリアの勝利とは同時に不可避的である』（註十）

斯くの如くしてマルクス―エンゲルスは資本の集中の事實の中にプロレタリアに依て建設せらる可き新社會の經濟的要素の發生を認めた。『總て既往の歷史は階級鬪爭の歷史である』（註十一）の辭句に概括せらるるマルクス―エングルスの所謂階級鬪爭說亦チェルケソフの主張する如く決してコンシデランの剽竊ではない。而してコンシデラン自身も亦斯說の創設者たるの名譽を擔ふ事は出來ない。斯說はコンシデラン及びマルクス―エンゲルスを俟たずして、其以前に諸文獻中に之を散見する事が出來る。Sulzbach に依れば階級鬪爭を經濟的說明せし最初と目す可き者は英國の社會學者 Adam

Fergusson の著作 Essay on the History of Civil Society である。(註十二) R. Picard に依れば、佛蘭西大革命勃發以前に於いて、夙に斯說は唱道せられた。即ち Necker, Raynal, Linguet, Marat, Turgot の如き早くも階級鬪爭の事實に着眼せしものである (註十三) 亦 Th. Rothstein は之を一八三〇年代に於ける英國のチャーチストに覓めてゐる。James Bronterre O'Brien の如き即ち之である。(註十四) Plechanow の如きマルクシストも亦階級鬪爭說は決して、マルクス—エンゲルスの創見では無く、彼以前に於て旣に存在せしものなる事を主張してゐる。而して彼は St. Simon, Thierry, Mignet, Guizot を列擧してゐる。(註十五) Saint-Simon の研究者 Friedrich Muckle の如きも之を承認してゐる。(註十六) George Adler, Grünfeld, Földe 等は何れも此點に關する Lorenz von Stein の影響を力說してゐる。(註十七)

依之觀之階級鬪爭說は夙にコンシデラン及びマルクス—エンゲルス以前に存在せし事實は之を否む事は出來ない。併し乍ら吾人は是等從來の階級鬪爭論者とマルクス—エンゲルスとの間に、自ら根本的見解の相違の存することを看過する事は出來ない。即ち彼等に於いては、著しく倫理的、獨斷的要素が包含せられてゐる。コンシデラン亦階級鬪爭の事實に着眼せるも而も彼も亦此域を毫も脫却してゐない。即ち彼に依れば階級鬪爭は最も嫌惡す可き罪禍である。從つて彼は此鬪爭を絕滅す可きことを以て社會問題解決の目的と認めてゐる。即ち彼は謂ふ

『勞働對資本の鬪爭の結果は封建的資本に依る、勞働及び少中資本の潰滅を齎らすか、若くは勞働者の叛逆に依る私有財產及資本の潰滅を齎らすが故に、此鬪爭の二個の不可避的の結果を避くる方法は唯一あるのみ、即ち C'est de faire

cesser la lutte 鬪爭を絕滅せしむる事である。』(註十七) と。

彼に依ればブルジョワジイとプロレタリアの利害は必ずしも根本的に相剋するものではなく寧ろ調和的可能性を有するものである。曰く

『今日に在つてはブルジョワジイは多數であり、彼等の理性は覺醒してゐる。勞働階級の物質的道德的慘狀並に之を救濟す可き必要に對する感情がブルジョワジイに崩して來た。社會的慈善が彼等に浸透し、彼等を鼓舞した。加之ブルジョワ階級は、產業組織に保障を與えること、財政的貴族主義の跋扈跳梁に對する抵抗に關しプロレタリアと其利害を均うすることを觀取するに到つた』(註十九)

斯くて彼は階級鬪爭に依る凡ての革命的行動を排斥し、唯一の解決策を、資本、勞働、才能が好く調和す可きフリエ的組合の建設を企圖したのである。即ち彼の階級鬪爭說は著しく倫理的要素を包含してゐる。

之に反しマルクス—エンゲルスに於いては、階級鬪爭說は全く別個の役割を演じてゐる。即彼等の階級鬪爭說の本質的は曩にカウツキイの指摘せるが如く『彼等が階級鬪爭を以て社會進化の推進力として認識し、而して此認識をプロレタリアの階級鬪爭に適用せし』(註二十) 點に存在するのである。爰にコンシデランの階級鬪爭說と截然區別せらるるのである。而してマルクス—エンゲルスは這個の鬪爭の裡に將來社會を實現す可きプロレタリアの歷史的任務を覓めてゐる。「共產黨宣言」は謂ふ

『プロレタリアはブルジョワジイに對する鬪爭に於いて必然的に階級に結合し、革命に依つて支配階級となり、支配階級として暴力的に、舊生產關係を撤廢し、此の生產關係と共に、階

級敵對の存立條件、階級一般及階級としての自家の支配をも廢止する。

階級と階級對立を伴へる舊ブルジョワ社會に代て各人の自由なる發展が萬人の自由なる發展の條件たる一個の聯合が現出する』（註二十一）と。

階級闘爭說に於いてもコンシデランとマルクス―エングルスの見解に根本的差違の存する事は何人も容易に洞察し得る所である。爰にもチェルケソフ、ラブリオラの穿鑿の粗漏が遺憾無く曝露せれてゐる。

吾人は以上諸說に就いてマルクス―エングルスの「共產黨宣言」がチェルケソフ、ラブリオラ、ラムウス、等の指摘するが如く晉にコンシデランの「社會主義原理、十九世紀民主主義宣言」の剽竊に非ざるのみならず、寧ろ兩者の間に超ゆ可からざる根本的の思想的鴻渠の介在する事を論證した。果して而らば此根本的相違は那邊より來れるか。吾人の見解に依れば、此は唯物史觀を基調とする科學的社會主義と、社會改造を理性の活動に訴ふる空想的社會主義との相違に歸着する。而してマルクス―エングルスは夙に『共產黨宣言』に於いて、サン・シモン、フリエ、オーエン等に依て代表せらるる所謂空想的社會主義を檢討し且つ克服して居る。即ち謂ふ

『固有の社會主義的乃至共產主義的學說、サン・シモン、フーリエ、オーウエン共他の學說は、我等が前に述べた所の無產者と資本家との闘爭の初期の未發達の時代に表はれる。

しかし、この學說の發明者は、當時の社會そのものの內に、階級對立と並に社會解消の要素とが動いてゐるのを看取した。併し彼等は、無產者階級の方面に於いて、歷史的な、獨立活動を、即ち無產者階級特有の政治的運動を認めなかつたのである。

階級對立の發展は、產業の發達と同じ步調を取るものであるが、彼等は、無產者階級解放の物質的條件を知らず、そして、何等かの社會的な學問に從つて、社會的法則に從つて、是等の條件を作らうと試みる。

かくて、社會的活動の代りに、彼等の個人的の思ひ付きの活動が、解放の歷史的條件の代りに、空想的條件が、無產者をば、漸次に階級たらしむる組織の代りに、自分で案出した社會の組織が代らなければならぬ。彼等から見れば來らんとする世界歷史は、彼等の理想社會のプロパガンダと實行とに歸着する。

しかし、彼等は、彼等の計畫が、主として社會の最も痛ましき階級たる勞働階級の利益を、代表するといふことを知つて居た。彼等は、無產者を以て社會の最も痛ましき階級と考へたのである。

しかし、階級闘爭の幼稚な形式と、彼等自身の生活上の地位とは彼等をして、自づから階級對立の上に超然たるものであると思はせる。彼等は、凡ての社會團體員の、否良き境遇の物質的地位をも、改善せんと欲する。それ故に彼等は、不斷に、無差別に、全社會に對し、否、特に支配者階級に對して、訴へた。曰く、凡そ理想的社會の思想的計畫を知らんとならば、唯だ、須らく彼等の學說を學ぶべしと。

從て、彼等は、凡ての政治的、殊に凡ての革命的行動を排斥する。彼等は、彼等の目的を、平和的方法で達せんとし、小さな、自然失敗す可き經驗に依り、模範の力に依り、新しい社會的福音の途を開かうとする……云々』（註二十二）

この論評は又フーリエの學說を遵奉するコンシデランの當然受納せざる可からざる批評である。爰に於いて、カウツキイが『共產黨宣言』は

コンシデランの學說を剽竊せし所か、却て反對にコンシデランの「社會主義原理」に對する反駁者たる感がある』（註二十三）と言へるは吾人の容易に首肯し得る所である。

吾人は、チェルケソフ、ラブリオラ、ラムウス等が單に斷片的章句の相似に眩惑せられ、加ふるに不周到不徹底なる考證に禍ひせられて、共產黨宣言を以てコンシデランの「社會主義原理」の剽竊なりと速斷せし輕舉を彼等の爲めに悲むものである。彼等無政府主義者——ラブリオラは社會民主主義者であるが、寧ろ無政府主義に傾いてゐる——が一フリエ主義者の著作を借用して故意に其政敵たるマルクス—エンゲルスを毀損し、以て萬一を僥倖せんとするは徒に人に依て事を成すものと言ふ可きである。予はGoetheのFaustの一節を想起する。

Wenn Ihr's nicht fühlt, Ihr werdet nicht erjagen,
Wenn es nicht aus der Seele dringt, Und mit urkräftigen Behagen,
Die Herzen aller Hörer zwingt.　（終り）

註一　Tscherkesoff—Die Urheberschaft des Kommunistischen Manifestes. S. 11-12.
註二　Kautsky—Das Kommunistisch Manifest ein Plagiat. Neue Zeit 24 Jahrg. 2. Bd. 695.
註三　Kautsky—a. a. O., S. 697-698.
註四　Marx—Die Heilige Familie" Aus dem Nachlass von Marx und Engels, 2. Bd. S. 131.
註五　Engels—Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft. S. 21.
註六　Kautsky a. a O, S. 698.
註七　Marx—Das Elend der Philosophie S.110.
註八　Marx—Das Kommunistische Manifest. S. 53.
註九　Adler, Georg—Die Anfänge der Marxschen Sozialtheorie. Festgabe für Wagner. S. 19
註十　Marx—a. a. O, S. 31. 37.
註十一　Marx—a. a. O, S. 25.
註十二　Salzbach—Die Anfänge der materialistischen Geschichtsauffassung. S. 51
註十三　Picard, R—L'idee de lutte de classe au XVIII. siècle. Revue d'économie politique Tome 25. p. 624
註十四　Rohstein Th.—Verkünder des Klassenkampfes vor Marx. Neue Zeit 26. Jahrg. I. Bd. S. 837
註十五　Plechanow—Über Die Anfänge der Lehre von Klassenkampf. Neue Zeit 21. Jarhg. I. Bd. S. 276
註十六　Muckle, Friedrich—Saint-Simon und die ökonomische Geschichtstheorie. S. 8
註十七　Adler, Georg—Die Anfänge der Marxschen Sozialtheorie Festgabe für Wagner. S. 18.
Grünfeld—Lorenz von Stein und Gesellschaftslehre.
Földe, Béla—Bemerkungen zu dem Problem Lorenz Stein—Karl Marx Conrad's Jahrbücher. Bd. 102. S. 289.
註十八　Considérant—Principes du Socialisme p. 21.
註十九　Considérant—ibid. p. 20.
註二十　Kautsky—a. a. a. O, S. 698.
註二十一　Marx-Engels.—Das Kommunistische Manifest. Kautsky's Ausgabe. S. 45.
註二十二　Marx-Engels—a. a. O., S. 52-54.（櫛田民藏氏譯借用）
註二十三　Kautsky—a. a. O., S. 702.

附記　本論文起稿に際し增井幸雄先生は前記コンシデランの原本を御貸與下さつた、ここに厚く先生の御好意を謝する次第である。

新刊紹介

金融の基礎知識

高橋龜吉著　菊判四一八頁
定價金三圓　東洋經濟新報社發行

改訂增補 國民豫算論

太田正孝著　四六判本文二九五頁
附錄七二頁　定價二圓五十錢
報知新聞社發行

金融に關する研究は從來多く銀行論の一部に委ねられて居り、隨つて金融を金融機關の方面から觀測することに重きを置く風であつたが、近時金融を一の經濟現象として、又は經濟的事實として取扱ひ、斯くて之に對する完全なる研究の行はれるに至つたことは經濟學研究の一新風潮として、吾人の喜ぶ所である。

高橋氏の新著亦金融に對する學術的研究の一を以つて、見る可きものである。本書の構造を見るに、先づ金融資金なるもの、性質を明にし、